

## 中沢宣夫訳：三位一体論

1975年8月 東京大学出版会 540+12頁

岡 野 昌 雄

10数年の歳月を費して仕上げられた中沢宣夫氏の労作、アウグスティヌスの『三位一体論』の完訳が公刊された。アウグスティヌスの著作のうちでも『告白』の翻訳は多く、わが国においても既に数種類が公刊されているのに比べ、『三位一体論』はその重要性にもかかわらずこれまで手がつけられていなかっただけに、この完訳出版は画期的な偉業と言える。本書の出現によってわれわれは測り知れない便益を得ることになろう。

哲学や神学の研究者のみならず、多様な読者が参加できることにより、わが国におけるアウグスティヌス研究の層と幅が拡大され、アウグスティヌス理解の新しい地平が開かれることが期待される。アウグスティヌスのようなタイプの思想家について、このことの意味は決して小さくはないであろう。

また、アウグスティヌスの用語法が日本語に定着する糸口が与えられた点も見逃すことができない。これは勿論単に訳語の「公認」ということではなく、翻訳の大部分が解釈の作業であるという点から考えてのことである。今日われわれが先人たちの労苦に基づいてプラトンやアリストテレスを日本語で論ずる場合と比較してみればはつきりするであろう。われわれはアウグスティヌスの用語の大部分を未だにラテン語そのままで使用しており、それに適合する日本語を創造し得ていない。この点に関しても中沢氏の訳業は特に意欲的であり、挑発的であるとさえ言える。ラテン語そのものもつ意味とアウグスティヌスの用語法とを睨み合わせつつ、同一の原語に対しても時に応じて幾通りもの訳語をあて（例えば *cogitatio*, *intentio*, *visio* など）、彼の用いている言葉の重層性を的確に捉えようとする吟味のあとが窺われる。

いずれの著作にしても決定訳などというものは存在し得ないのかもしれないが、ともかくも信頼に足る翻訳を通してアウグスティヌスの思想の全体を理解するという途方もない営みがたゆみなく続けられ、それによって原典による更に一層厳密な

研究が促される貴重な第一歩となることは疑い得ないところであろう。

これまで『三位一体論』の一部を拾い読みする程度で深く学んだことのない筆者は本書の内容について批評する資格に最も欠けている者であるが、前述の多様な読者の一人として、ただ訳書全体を通読した限りでのかなり雑駁な感想を幾つか述べさせて戴くことにする。

本書の内容は難解であり（特に前半部）、文章も決して読み易いものではなく、翻訳の困難さが偲ばれる。要領を得た簡潔な解題によって、われわれは本書全体の議論の展開について見通しを与えられるが、本書を貫いてわれわれを強く魅きつけるものは、アウグスティヌスの「問い求める」姿勢であろう。この言葉はしきりと繰り返されるが、彼の考え方をよく表わしていると思われる個所を第9巻第1章から引用してみよう。

「私たちはたしかに三位一体を問い求めている。それも或るなにかの三位一体ではなく、神なる三位一体、真実にして最高唯一の神なる三位一体を問い求めているのである。だから、読者よ、待って欲しい。私たちはなお問い求めの途上にあるからである。もし問い求める人が、知りかつ語るのに極めて困難な事柄を確固たる信仰において問い求めているなら、誰もその人を非難する権限をもたない。しかし、問い求めているのではなく断定する人を、もっとよく考え、あるいは真実を教える者が誰であれ、直ちに非難するのは正当である……私たちは信ずべきことについては不信実によって疑わないように、知解すべきことについては軽率にも断定しないようにしたい。信ずべきことについては権威が保持されなければならない、知解すべきことにおいては、真理が尋ね求められなければならない。」

三位一体の秘義を知解しようとする本書の試みは、信仰箇条を体系的に説明するという意味での単なる教義論に終らず、彼の全精神を傾けての思索のドキュメントをわれわれに提示している。中沢氏は「三位一体について思惟うことは信仰の読み取り（知解）であり、それは究極的には聖書の言葉の解釈論になる」と述べておられるが、氏の意見は至当であると思われる。アウグスティヌス自身本書の冒頭で「理性への未成熟にして道外れの愛によって欺かれる人々」の誤謬を指摘した後、「この類いの誤謬から人間の精神が純化され得るように、未熟な者たちと共に歩む聖書はいかなる種類の事物の言葉をも避けなかったのである。そして、これらの言

葉から、私たちの知解力はいわば段階的に、神的にして崇高なものに向って、あたかも育まれたもののように立ち上るのである」と語り、この「問い求め」が、実に肉となった言葉を通して真理なる御言そのもの、ものそのものに肉迫していく、思索力を集注し尽しての困難な営みにほかならないことを示している。「外的に響く言葉は内的に閃く言葉の徴し」(XV, 11, 20)であり、「内密な言葉」(XV, 15, 25)の読み取りこそ、われわれの知解の働きであると言えよう。それはまた同時に、「精神の眼ざし」が捉えたものを語ることによって、われわれの言葉を純化しつつ、真に似像に適わしいものとして造り出して行く営みでもある。ここからアウグスティヌス独特の言葉の世界が生み出されてくると思われる。

彼は実りをもたらさない空しい思念にはかならない多弁や饒舌をきっぱりと拒けているが(XV, 28, 51)、思念 *cogitatio* とは心の語り *locutio cordis* であり、それは精神の言葉によって行われねばならないからである。言葉は内的に語られることによって生まれるものであり(IX, 7, 12)、単なる記号や符牒ではない。三種類の言葉(IX, 10, 15)のうちで彼が中心的に考えているのは愛と共なる知としての言葉であるが、しかし他のものが斥けられているわけではなく、それらはいわば重層的に連っている。先に引用したように、何よりも聖書がそうした多様な言葉を用いているのである。アウグスティヌスの聖書解釈は、言葉を通して、「語られるよりはさらに真実に思惟され、また思惟されるよりはさらに真実に存在する」神の観想にまで至る、危険に満ちた大胆な営みであると言えよう。

従って、聖書の言葉とアウグスティヌスの思惟は一体となっており、夥しい聖書の引用は単なる付け足しではない。中沢氏の配慮はこの点でも行き届いており、引用された聖句を機械的に訳すことをせず、アウグスティヌスの言葉の世界に即して極めて適切な訳を試みておられるし、特に、聖書全体との関わりを捉えるために、詳しい聖書索引を巻末にまとめられたのは有益である。

訳註も密度の濃い貴重な示唆を与えてくれるが、それだけに強いてぜいたくを言えば、もっと沢山あっても良いのではないか、多少切り詰められた感じがする。それにもう一つ、用語索引が、例えば『神学大全』邦訳のように、もっと詳しくあったら、どんなにか便利なことだろうと思う。中沢氏の労作に報ゆるに応わしからざる雑駁な感想を終えるにあたり、更めて氏のご努力に対し敬意と謝意を表したい。